①がまくんは、げんかんの前にすわっていました。

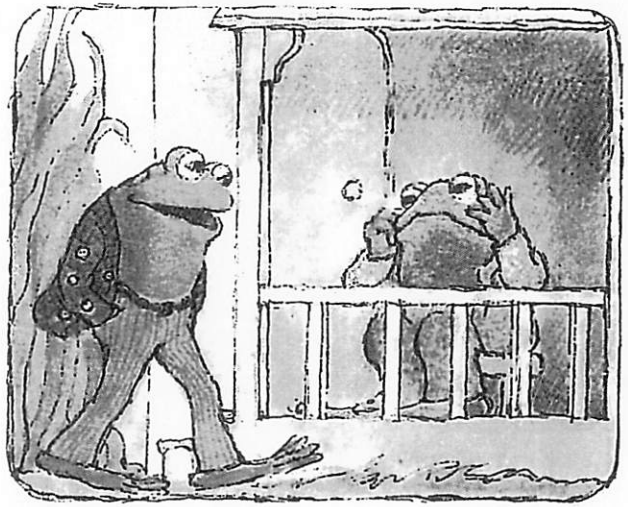
②かえるくんがやって来て、言いました。

「どうしたんだい、がまがえるくん。きみ、かなしそうだね。」

「うん、そうなんだ。」

がまくんが言いました。

「今、一日のうちのかなしい時なんだ。つまり、お手紙をまつ時間なんだ。そうなると、いつもぼく、とてもふしあわせな気もちになるんだよ。」



「そりゃどういうわけ？」

かえるくんがたずねました。

「だって、ぼく、お手紙もらったことないんだもの。」

がまくんが言いました。

「いちどもかい？」

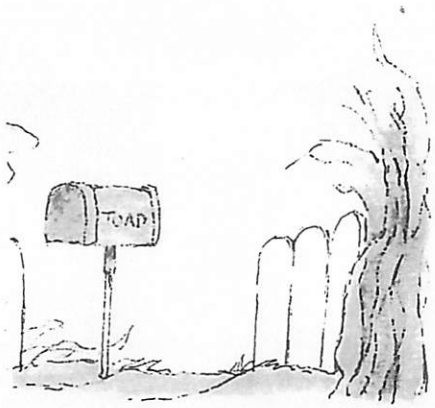
かえるくんがたずねました。

「ああ。いちども。」

がまくんが言いました。

「だれもぼくにお手紙なんかくれたことがないんだ。毎日、ぼくのゆうびんうけは空っぽさ。お手紙をまっている時がかなしいのは、そのためなのさ。」

③二人ともかなしい気分で、げんかんの前にこしを下ろしていました。



④ すると、かえるくんが言いました。

「ぼく、もう家へ帰らなくっちゃ、がまくん。しなくちゃいけないことがあるんだ。」

⑤ かえるくんは、大いそぎで家へ帰りました。

⑥ えんぴつと紙を見つけました。紙に何か書きました。

⑦ 紙をふうとうに入れました。ふうとうにこう書きました。

「がまがえるくんへ」

⑧ かえるくんは、家からとび出しました。知り合いのかたつむりくんに会いました。

「かたつむりくん。」

かえるくんが言いました。

「おねがいだけど、このお手紙をがまくんの家へもっていって、ゆうびんうけに入れてきてくれないかい。」

「まかせてくれよ。」

かたつむりくんが言いました。

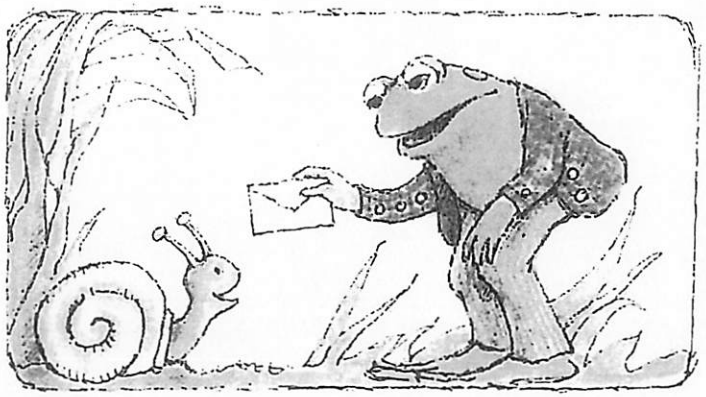
「すぐやるぜ。」

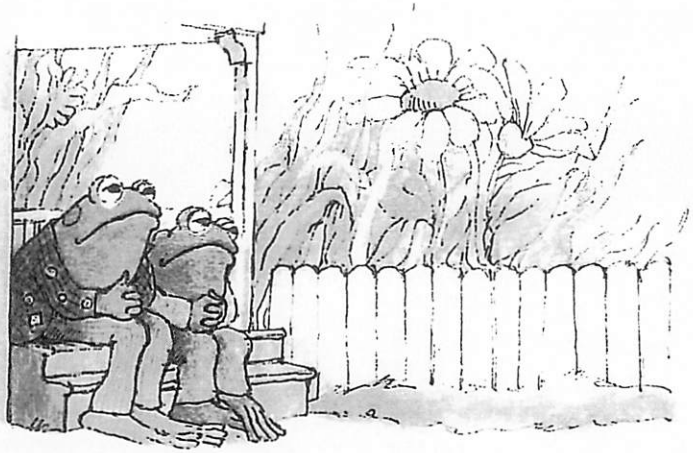
⑨ それから、かえるくんは、がまくんの家へもどりました。がまくんは、ベッドでお昼ねをしていました。

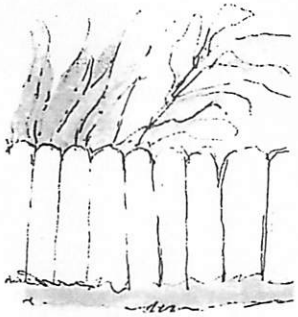
「がまくん。」

かえるくんが言いました。

「きみ、おきてさ、お手紙が来るのをもうちょっとまってみたらいいと思うな。」

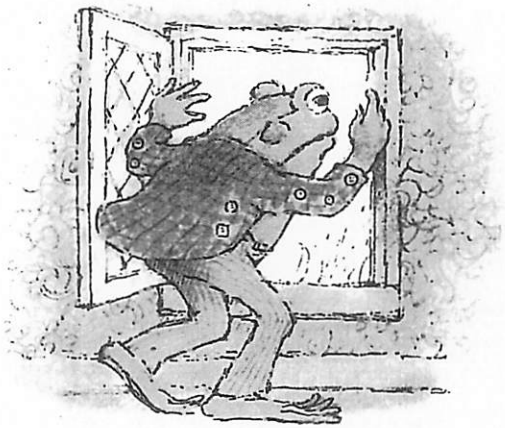


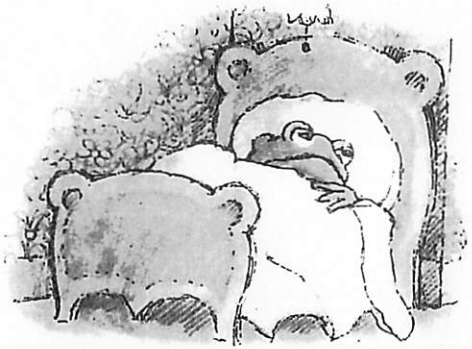




「いやだよ。」
がまくんが言いました。
「ぼく、もうまっているの、あきあきしたよ。」

⑩ かえるくんは、まどからゆうびんうけを見ました。かたつむりくんは、まだやって来ません。
「がまくん。」
かえるくんが言いました。
「ひょっとして、だれかがきみにお手紙をくれるかもしれないだろう。」
「そんなことあるものかい。」
がまくんが言いました。





「ぼくにお手紙をくれる人なんて、いるとは思えないよ。」

⑪ かえるくんは、まどからのぞきました。かたつむりくんは、まだやって来ません。
「でもね、がまくん。」
かえるくんが言いました。
「今日は、だれかがきみにお手紙くれるかもしれないよ。」
「ばからしいこと言うなよ。」
がまくんが言いました。
「今まで、だれもお手紙くれなかったんだぜ。今日だって、同じだろうよ。」

⑫ かえるくんは、まどからのぞきました。かたつむりくんは、まだやって来ません。

「かえるくん、どうしてきみ、ずっとまどの外を見ているの。」

がまくんがたずねました。

「だって、今、ぼく、お手紙をまっているんだもの。」

かえるくんが言いました。

「でも来やしないよ。」

がまくんが言いました。

「きっと来るよ。」

かえるくんが言いました。

「だって、ぼくがきみにお手紙出したんだもの。」

「きみが？」

がまくんが言いました。

「お手紙になんて書いたの？」

かえるくんが言いました。

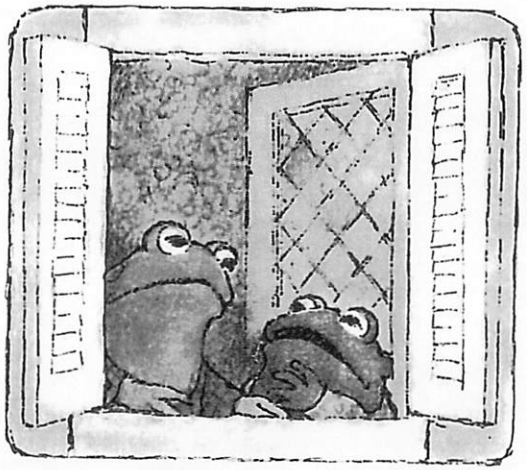
「ぼくはこう書いたんだ。

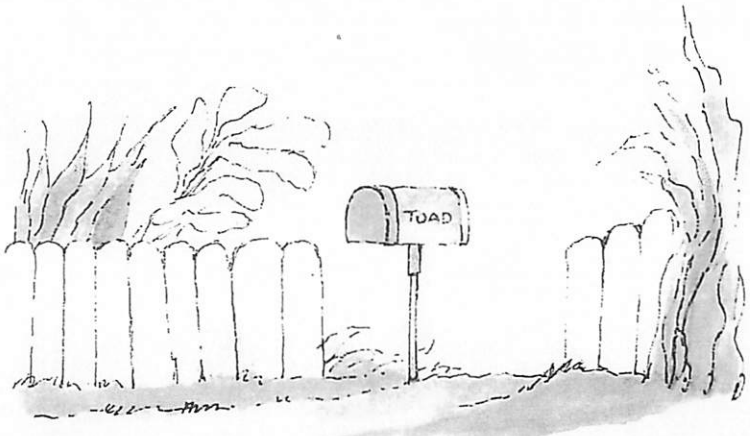
『親あいなるがまがえるくん。ぼくは、きみがぼくの親友であることをうれしく思っています。きみの親友、かえる。』」

「ああ、」

がまくんが言いました。

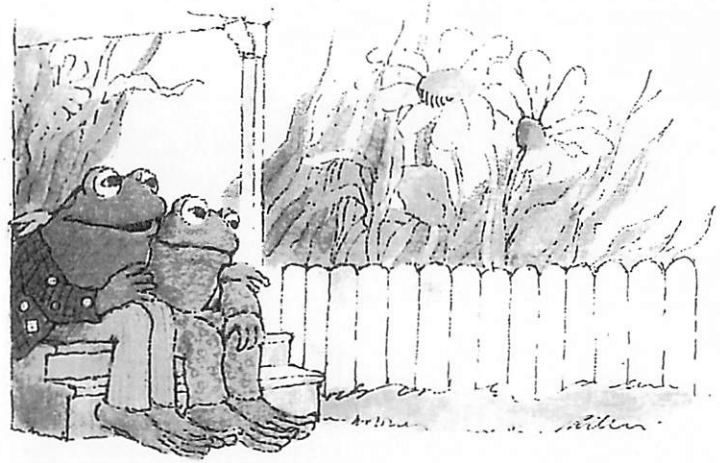
「とてもいいお手紙だ。」





⑬ それから二人は、げんかんに出て、お手紙の来るのをまっていました。二人とも、とてもしあわせな気もちで、そこにすわっていました。

⑭ 長いことまっていました。

⑮ 四日たって、かたつむりくんが、がまくんの家につきました。そして、かえるくんからのお手紙をがまくんにわたしました。

⑯ お手紙をもらって、がまくんはとてもよろこびました。